

竜馬外伝



i

44

有栖川宮の野望の章

中祭邦乙

人は社会構造に順応し、それに凝り固まってしまうものである。そうやって生きる術を身に付けているのだろう。

やがて日本人は一方的な情報だけを信じて生きていくようになった。

それを知った徳川家は儒教の教えを取り入れ、朱子学をその根本とし、上に逆らわぬ日本人の特性を利用して支配してきたのである。

身分制度もその一つだ。家が受け継いできた身分を継承する事を絶対としたのだ。

しかし一方通行の思考で凝り固まっては善悪の判断を見失ってしまう。本当の自分の使命すらも見失ってしまう。

そんな時代であった。

でも、坂本竜馬は違った。

物事には表があれば裏もある、そう理解した上で、その中間的な思考を持ち続ける事こそが大切なのだと知っていたのである。

(最も大切なのは、中間的な思考だ。その立場を理解するためには、まず物事の裏を見抜く能力が必要だ)

竜馬にはそれがあり、表裏を融合させる能力があった。

それに深く関わるのが松果体である。

『松果体』。

それは脳に存在する小さな内分泌器であって、脳内の中央、左右大脳半球の間にある卵形の小体である。

松果体の働きは人にイメージやビジョンを見させる事である。『第3の目』とも呼ばれ、物事の本質を見抜く能力とも言われていた。

太古の人々は特にそれが顕著だった。透き通るような松果体を保っていて、テレパシーや靈感などを日常の生活に取り入れる事が出来たのだとも言う。

更には人生を正確に見る能力。

坂本竜馬はそれに秀でている。

世の中の動きや善悪を偏見なしに感じる事ができ、物質的な価値や物事の体裁に惑わされず、本質を理解するようになっていた。その嗅覚が優れ、先を見通し、想像し、将来を構築する事も出来るようになっていく。

それが度々目にする竜馬の先読み能力の発現であった。

竜馬の持つ能力は、偏見なく物事の本質を見ようとする心から培われていたのだ。

「今は・・・産業革命による大航海時代から始まった西洋先進国による植民地争奪の延長線上にあるのだ」

正しい知識を持つ国内の有識者達は今の時代をそう理解していた。

そして異国人という人の形をした生命体が日本にとって危険であると認識していたのである。

何故なら・・・、

「彼らが日本にやって来るのは、日本を西洋人の植民地としたいからだ。・・・このまま幕藩体制が崩れて国内で内戦が頻発して日本が分断されれば、天皇を中心とした国体が崩壊し、密かに根を拡げている西洋人達が日本政府の混乱に乗じて間接的に次の統治者を選び出すつもりなのだ。そうやって間接的に植民地化を推し進めるのが奴らの常套手段だ」

彼らが世界各地でやってきた手法である。

「日本に介入する絶好期が訪れようとしていると嗅ぎ取っているのさ、奴らは。きっと日本国内で戦争が起こるように仕向けてくるだろうよ」

勝海舟は竜馬ら海軍塾生にそう説明していた。異国の企みをそう読んでいたのだ。

西洋文化を学んだ有識者達もそう訴えている。

そしてその危機感を感じ取った天皇が攘夷を口にした事で、呼応した志士と呼ばれる地方の若者や脱藩浪人達が立ち上がったのだ。

・・・尊王攘夷である。

「異国人を我が神州から排除せよ！ 腰抜けな徳川幕府は異国の言いなりだ、天皇を中心とした神国を取り戻すのだ！」

その運動の中心は水戸藩であり長州藩だった。

彼等は己の主義主張のためになら玉砕すら美しいという精神に従い、染まり、行動した。そして、

「異国人から日本国を守るために倒幕せよ！」

とまで口にするようになった。いやそればかりか、好機とばかりに徳川家にとって代わろうという野心を抱き、新体制をも目論み始めたのである。

・・・望みは徳川体制の終焉、世の一新。

「目指すは倒幕だ！」

長州藩の精神的支柱・吉田松陰はそう叫んでいた。その松陰がこの世を去っても弟子達はその教えを継承して、今の長州藩を動かしているのだ。

久坂玄瑞・高杉晋作、・・・彼らを中心とする長州奇兵隊は過激さを増していく。その根底に流れているのは『天皇による治世への回帰』という建前、そして『低い身分を持つ下士達の士族への解放』という目的も持ち合わせていた。

そのために旗印にしたのが『倒幕』の二文字である。

倒幕を叫んで人心を結束し、奇兵隊以下過激緒隊を扇動して、異国とも幕府とも戦い始めたの

である。それが長州の馬関海峡封鎖と異国船への無警告攻撃であり、異国と条約を結んだ幕府への反抗であった。

無謀な戦い方であった。

だが効果は絶大だった。

多くの日本人が長州藩を喝采し、朝廷までも背後から動かし始めたのである。

徳川幕府が維持し続けた絶対的権力を朝廷が取って代わるのか。

・・・だが勝海舟はある危惧を抱いていた。

「きっと長州に大きなしっぺ返しが来るぜ」

海舟の読みは当たった。

尊王攘夷を唱えて朝廷を牛耳っていた長州を、幕府側の公武合体派が一夜にして京から追放したのである。実行したのは薩摩藩と会津藩だ。

天皇の発する勅を好き勝手に利用して朝廷を実質支配していた長州藩に対して、天皇が断を下したのだ。

「尊王とは口先ばかりだ。倒幕し天下を掴むのが長州の本心であろう」

そう気付いた孝明天皇が中川宮に命じて、薩摩藩と会津藩に長州追い落としをさせたのである。

長州を西国に追いやると、代わって薩摩が京を制圧した。そればかりか薩摩の島津久光は朝廷の名の下に賢侯を京に呼び寄せて、彼らを朝議の参豫にさせたのである。今後は賢侯達の合議制で日本を動かそうというのだ。

・・・つまり島津久光は実権を幕府から剝奪して、参豫を加えた形の朝廷に権力を移行させたのである。

それは決定的だった。

全ての決定権は参豫と朝廷が持ち、すなわち朝廷が日本の決定機関となったのである。一方の幕府は完全に決定権を失って江戸の幕府は形骸化し、京の二条城に詰める老中達が幕府機関として残ったに過ぎなかった。

だが異国からすれば、交渉窓口となっているのは諸外国と通商条約を締結した幕府である。

和宮が將軍家へと嫁いだ条件として天皇に攘夷を約束している幕府はいよいよ難しい立場に立たされた。

そこで幕府は開港している横浜港を閉鎖するという秘策を攘夷であると主張する方針で動き始める。鎖港交渉団をヨーロッパ諸国へと送り込んだのである、・・・実質は難しいと知りつつも。

諸外国にすれば正式に日本と条約を結んでいる立場である。それを盾にして西洋人達は幕府や西南雄藩に接触して、双方を対立させるべく暗躍し始めていた。・・・日本の分断こそが日本侵略の好機になるのだと、重々理解していたのであるから。

「西洋人には策謀があるぜよ」

坂本竜馬はそれを察知していた。そして危機感を抱き、手薄になっている北方の護りのため、蝦夷地に京の浪人達を送り込む構想を実現しようとしていた。浪人に蝦夷の開墾と国土防衛の役目を与え、蝦夷を狙うロシアへの防波堤とする方策である。

「これを実施すれば、日本の北方の護りを強化出来るぜよ。そればかりか京の治安を乱している浪人達を京から遠ざけられる。つまり国家の危機を招く浪人問題も解決出来るぜよ」

「一石二鳥になるな」

竜馬の構想は軍艦奉行の勝海舟ばかりか、元外国奉行の大久保忠寛も後押しするものであった

。京にあって長州に扇動されて問題化している脱藩浪人問題を、幕府の資金力を利用して蝦夷に送り込むという解決策である。名案であった。

だが勝海舟にはまだ危惧している事があった。

「世界から見て、長州には国際法違反という大問題がある。その報いがやって来る」と言うのだ。

「報い？」

「異国が手を組んで長州攻撃を企てているんだ」

竜馬は海舟の顔を睨んだ。

「そりゃ、まっこと！」

「本当だ！ 長州がやった馬関海峡封鎖も異国船への無警告攻撃も、国際法違反なのだから、当然の報いだ」

「国際法・・・ですか、それはそんなに重要ながです？」

「そりゃそうよ、海は世界と繋がっているんだから、世界共通の法律があるのは当然さ」

竜馬は渋々といった感じで頷いた。

「ならば長州は世界中を敵に回しちゅうという事かよ」

「そうなるさ」

「何とも・・・まっこと絶望的な・・・」

「その上、幕府も長州藩の暴走を抑え込みに動き出そうとしている」

「あちゃー、長州藩は益々もって追い込まれるが？」

竜馬は長州を思いやって頭を抱えた。

「それが今の長州の立場だ」

厳しい目をして海舟はそう答えた。

・・・もう既存の組織だけで戦うのは難しい。

長州藩の家老達はそう考え、最後の賭けに出た。

「もう高杉晋作に期待するしかない」

それが奇兵隊である。

高杉がに立ち上げた奇兵隊は武士という身分を持たぬ者達の集団であった。

藩士でなく非正規の者達を組織化した集団、現状からの脱却を求めて立ち上がった身分の低い者達の集団なのだ。だから彼等には武士の矜持もなければ、作法もない。そして殿様への忠義も、情けすらもないのである。

「武功をあげて侍になりたい！」

それだけが彼らを動かしているのだ。

あるのは怒り、現状の身分制度への怒り。だから異国人に打ち勝ち、幕府を倒せばそれで良い

。

「世を一新させるのみ！」

これまで低い身分に虐げられてきた彼等は、これまでの身分制度をひっくり返したいのである。そのためになら戦国の世の到来をも望んでいるのだ。

「長州が天下を掴んで世の中の有り様を変える。そして我らが高い身分を手に入れる。徳川家を一気に将軍家から引き釣り落とす、・・・今がその好機だ！」

口々にそう叫んでいた。

関ヶ原の合戦で敗れて萩の地に追いやられた長州藩の怒り。そして虐げられてきた身分の低い者達の歴史。それらが爆発の時を迎えているのあった。

吉田松陰の唱えた草莽崛起、それが日本を守る最後の手段であり、武士にあらぬ者が立ち上がる好機を作り出したのである。

奇兵隊とは、

『世の一新を願って戦う武士にあらざる者』

本質は烏合の衆である。

それを率いるのが高杉晋作。吉田松陰の発した草莽崛起の継承者である。

今後、この高杉がそんな奇兵隊を活性化して、倒幕と維新を現実化する破壊的原動力とするのだが、その後ろ楯となって彼らに武器支援するのが後の坂本竜馬なのである。

竜馬は幕府海軍の立場にありつつ、倒幕にも荷担する微妙な立場へと流れていくのだ。

その坂本竜馬が若き日、憧れた剣豪は大石進であったが、その竜馬と同じく大石に影響を受けて大石神影流を学んだ人物に鳥取藩士・河田景与（かわた かげとも）が居た。

互いにそれを切っ掛けにして剣の腕を磨き、尊王攘夷へと傾倒していったのであるが、竜馬は尊王攘夷から脱却し、河田は尊王攘夷にドブプリと浸かった。

そこが異なっていた。

そもそも鳥取藩と水戸藩は太い繋がりがあるから、鳥取藩士の河田は当然のこと尊王攘夷に染まりきり、遂には鳥取藩尊王攘夷の筆頭へと賭け上がっていく。

それが河田景与の運命なのか、やがて長州の桂小五郎と接触し始め、何とも不穏な動きを見せ始めるのである。

鳥取藩の藩主・池田慶徳は水戸藩主・徳川斉昭の五男であり、藩論も尊王攘夷に傾いていた。そんな中で河田景与は文久期には京都留守居となり、鳥取藩尊王攘夷派の中心人物となっていた。そうなれば同じく長州藩尊王攘夷派の中心人物・桂小五郎と交流するようにもなっていく。

しかし京で八月十八日の政変が起こされて長州藩や尊王攘夷派公卿が京から一掃されると、鳥取藩内でも尊王攘夷派と公武合体派との軋轢が噴出した。そして京の本圀寺にて尊王攘夷派が公武合体派数名を殺害する事件が起こったのだ。いわゆる本圀寺事件である。

鳥取藩は混乱していた。

事件後も鳥取藩尊王攘夷派の中心として行動していた河田だったが、そんなところに長州の桂小五郎がより強力な強調を求めてきたのである。

その方策が驚きだった。

「親長州の公家・有栖川宮熾仁親王（ありすがわのみやたるひとしんのう）を擁立して共に挙兵しようではないか！」

思わぬ言葉だった。

河田景与は目を見開いた。

「有栖川親王を担ぎ上げると！」

「そうだ！」

事態は切迫していたのである。

「有栖川宮熾仁親王の決意をもって、孝明天皇と一戦起こすのだ！」

小五郎はそう言い切った。強烈な眼力を向けている。

冷や汗が流れる。

（長州はそこまで、・・・こんなにも危険な事を企てているとは・・・）

有栖川家は毛利家の遠戚にあたる公家である。その上、反孝明天皇であった。そして有栖川宮熾仁親王自身にも孝明天皇に対する深い恨みがあった。

熾仁親王と和宮との婚約を破棄された恨み。愛し合う二人に約束されていた婚姻、それが奪われた恨みがあるのだ。

・・・消え去る事のない孝明天皇への憎しみ。

それが心の底に渦巻いている。

（長州と手を組んで孝明天皇を引き釣り下ろしてやる。そして・・・自らが天皇に・・・）

有栖川宮熾仁親王はそこまで描いたのかもしれない。

それを知ってか知らずか、孝明天皇は有栖川宮熾仁親王を西国鎮撫使に任命した。長州を押さえ込む役目である。

有栖川宮熾仁親王は悩んだ。

(・・・長州につくべきか、いや今は孝明天皇の命に従って長州へと刃を向けるべきか・・・)

冷静に判断しなくてはならない。

そして、期を譲る、と決めた。

「今は孝明天皇に尽くそう、・・・今は」

長州と手を組むのを見送った。

(・・・けれど決して諦めたわけではない。長州が立て直したならば、その勢いに乗じて立ち上がろう。・・・自らが天皇となるために！)

有栖川宮はいずれ長州につく事を決心していた。

このように、京の朝廷内はますます混沌としていく。

・・・長州に通じる有栖川宮、・・・朝廷参預となった幕府側の一橋慶喜には中川宮がつき、
・・・孝明天皇には中川宮の兄・山階宮がついている。

それぞれの勢力の代理戦争として、朝廷内で争いが繰り広げられるのである。

だが本音のところでは、長州藩は有栖川宮熾仁親王を天皇にまで持ち上げるつもりはなかった。

彼らは孝明・有栖川宮ら北朝系の実力者を天皇から外した後、南朝系の新天皇を据えるつもりだったのである。・・・何故なら、長州には長州の育てた次期天皇候補が用意されていたからである。

日の暮れの中で遙か南の空に目をやる。

故郷の事を思い出さずにはいられなかった。

・・・乙女姉さん・・・。

(兄さんは元気にしちゅうろうかのう。・・・春猪は婿を迎えたいが、上手くやっちゅうろうか。・・・甥っ子の赦太郎もなんぼか大きくなちゅうろうが、乙女姉さんはちゃんと母親をしちゅうろうか)

そう思うと笑みも零れる。

心配もある。妙な噂も耳にしているのだ。

権平の亡き妻・千野の弟である川原塚茂太郎(かわらづか もたろう)が劣勢に陥った土佐勤王党の同志を集めているらしく、勤王党の名誉挽回のため藩に建白書を提出しようと奔走しているというのだ。

(もう勤王党は容堂に潰されちゅうきに、茂太郎の身も危険になるろう)

・・・武市さんももうダメか・・・。

そして平井加尾。

(・・・加尾)

逢えなくなってから、随分と月日が流れた。兄の平井収二郎は容堂に殺されたようなものだから、きっとその悔しさを抱えて苦しんじゅうろう、きっと。けんどそれを微塵も見せずに、強い女性を演じちゅうろう)

それが痛いほどに分かるのだ。

(・・・加尾の奴)

加尾の性格はよく解っている。

以前、京で三条家に支えていた際には志士の手助けをしていた加尾だ。共に志士として行動しようと言って幾度か誘いもした。

しかし今の竜馬は違う。

単純な尊王攘夷に燃えていたあの頃とは違うのだ。

・・・大攘夷のために、攘夷を一旦捨て、幕府の配下となっている身。

(すまん、加尾)

竜馬もまた苦しんでいた。

互に通じあえているのに、離れ離れになる運命なのか。

それがどうしても納得出来ない。

己の行く道、己の運命は天によって導かれていると信じている。人智の及ぶ事ではないのは分かっている。でも、加尾と引き裂かれる運命だけはどうしても受け入れられない。

・・・何故よ！

この苦しみがずっと心の奥底で疼いているのだ。

千葉道場の佐那に心を寄せてもみるが、やっぱり加尾は特別な存在なのだ。
心底から信じ、心許せるのはきつとこの世に加尾しかいないのだろう。
きつと・・・。

日本国内では幕府打倒を狙う長州、そして次の実権を狙う薩摩がそれぞれに暗躍している。そんな両藩に対して背後から支援しているのがイギリスである。長州も薩摩も実戦を経験した結果、イギリスと手を組む事を選択していたのだった。

一方、徳川幕府はフランスとの関係を深めていた。

当時のフランスは皇帝ナポレオン3世の治世下にあり、レオン・ロッシュを駐日公使に任じた。そして幕府の鎖港交渉使節団をフランス軍艦ル・モンジュに乗せ、ヨーロッパへと送り届けようとしていたのである。

協力的だった。

幕府はフランスやイギリスの本国と鎖港交渉するつもりだった。

鎖港交渉使節団は横浜港の鎖港に向けて幕府が西洋に送り込む面々で、使節団の正使は外国奉行の池田長発（ながおき）、副使は同じく外国奉行の河津祐邦（すけくに）、そして目付に河田熙（ひろむ）。彼等を中心とした総勢三十四名の大使交渉団であった。

その目的は二つ。

一つはフランス人殺害事件の賠償交渉である。それを口火に横浜港の鎖港を持ち掛けるのが二つ目の目的であり、交渉団の真の目的であった。

鎖港交渉こそが真の目的なのだ。

ル・モンジュは西へと向かっていた。

— 上海 —

ル・モンジュが最初に寄港したのが上海だった。

そこは巨大な都市であったが、明らかに西洋人に支配されていた。西洋人は港と道を整備し、ここをアジア貿易の拠点として機能させていたのである。

清国人は西洋人の目を避け、野良犬のように生きていた。

ここまで清国人が貶められる原因は何か、・・・その原因はアヘン戦争にあった。イギリスに利用され、その挙げ句には戦争を仕掛けられ、その結果、蒸気機関と最新兵器を用いたイギリス海軍による制圧という形で戦争は幕を閉じたのであるが、上海は乗っ取られてしまったのである。

もう西洋人の理屈に従うしかなかったのだ。上海は自由港という形で西洋人のものになった。・・・商社が乱立した。

ジャーディン・マセソン商会やデント商会・・・。彼らの背後にはアヘン取引が隠されている事を池田長発は知っていた。一年半前の幕府使節団からそれらの情報を得ていたからである。そしてその一行には長州の高杉晋作や薩摩の五代才助が参加していたのだが、彼らが反徳川の先兵であったとは池田長発も気付いていなかった。

しかし確実に、今から一年半前に、高杉も五代も異国に蹂躪された清国人の姿を目の当たりに

していたのである。そして彼らは気付いたのだ。

・・・西洋人による侵略の危機と恐怖を。

高杉と五代のその後の行動は異なるものになったが、それぞれの場で戦い始めていた。長州の高杉は攘夷への過激さを増幅し、薩摩の五代は異国に接近する事を選択していく。

両者は極端に異なる形で走り始めたのである。

池田長発は絶句した。

上海の人民が置かれた現状はそれ程に衝撃的だったのである。それでも池田長発は何とか言葉を振り絞った。

「・・・現実には悲惨だな、・・・想像していたよりも」

見掛ける清国人民の一人一人には人としての覇気がない。誰しものが無気力な夢遊病者のような目をしているのだ。

「アヘンに侵されているのか？」

誰も答えなかった。

まるで生きる屍。西洋人に逆らえず、ただ生きながらえているに過ぎない。

一方の西洋人は清国人を人とは見ておらず、虫けらを売り買いするかのようにな隷として扱い、売り飛ばす。

「・・・嫌な気分だ」

池田長発は嫌悪感を抑えようとして唇を噛んだ。

武士としての矜持、異国から日本を守るという使命が身体中を熱くする。

・・・西洋人め！

強い攘夷への傾倒を抑えられない！

それは嘗て長州の高杉晋作が感じた怒りだった。それを今この池田も痛感しているのだ。

異国人が日本人を奴隷化する姿が想像される。

(・・・このままでは数年後に日本も・・・)

日本を守らねば！

鎖港交渉の必要性を痛感した。

そんな池田長発の前にある人物が現れた。

意外な人物だった。

— 神戸 —

「わしはかならず日本を変える。それまでは絶対に死なんき！」

竜馬は塾生達の前でそう言い切った。

それを傍で聞いていた近藤長次郎が頷いた。竜馬の一言一言が塾生達の不安を拭い去り、惹き付けるのだと知っている。土佐にいる時からそうだった。

・・・竜馬にはそんな魅力がある。

長次郎はずっとそう感じてきた。それを重々承知しているのだ。

竜馬はこうも言った。

「我等の行く道に失敗などない！」

その目には光が宿っている。

瞳の奥には確固たる確信があるからだろう。

・・・自分達は正しい方向へと進んでいる。

そう信じて疑わない。

その証拠にこうして幕府や大藩の重役に近付き、軍艦奉行勝海舟の下で動く事が出来ている。日本を左右する活動をしているではないか。

(天が導いちゅうがぞ)

ただ、竜馬はこうも言った。

「敵は自分の心よ。・・・敵は心のうちにあるぜよ」

と。

「それは失敗や過ちを恐れる心よ！」

そう断言した。

「恐怖に負けてはならん！」

不安や不信が物事の邪魔をするのだ。

・・・魔。

それを竜馬は敵視している。

人が心に恐怖を抱く事で存在し、恐怖心があるから闇の中で生き延びる事が出来る。そんな存在、・・・それが魔なのだ。

魔が差す、魔が入る。人は古来よりそれが人類の敵だと気付いていたのであろう。

だから人は本能的に闇を恐れている。

竜馬は、それを克服してこそ道は開ける、異国を凌駕できると言い切った。

「恐怖心が真実を見えなくさせちゅうがよ！ わしは負けん！ でも、わしだけやない。一人一人の戦いよ！ 天が味方よ！ わしが特別やない、おまんも、おまんも、誰もが天に愛されちゅうがやき」

それが救いの言葉だった。

「人は弱肉強食を理由にして、強者が弱者を虐げる。だがそれは間違いだと誰もが解ちゅう

はずじゃ。人の心は善を志向するようになっちゅうがやきに」

心の中でいつもそう繰り返している。

子供の頃から見えてきた悪しき身分制度。上士が下士をいたぶってきた歴史。

「わしはそれをブチ壊したいんじゃ！ 世の中を正したいんじゃ！」

「攘夷だ！！」

上海から戻った高杉晋作はより過激になった。英国公使館焼き討ち事件を起こしたものの、それだけで気が済むはずもない。

「直ぐに海軍力を増強すべきだ！」

と訴え、オランダから蒸気船を購入するよう藩に働きかけた。そればかりか、

「異国に媚びる幕府など倒してしまえ！」

と倒幕すら口にするようになったのである。漸く師・吉田松陰の思想に追いついたのだ。

上海で感じた異国人への嫌悪が、彼を目覚めさせたのだ。

池田長発（ながおき）もそんな高杉晋作と同じく熱く強い心が溢れていた。

怒り、激しい嫌悪。そして攘夷。

（侵略者め！ 異国人め！）

怒りの炎が燃え盛る。

・・・しかし武士が取り乱してはならない。

何とか心を静めて平静を保とうとする。

（幕府を代表する鎖港交渉使節団の正使である限り、感情に流されて目的を見失う訳には行かない）

己を律するのが武士である。

顔色を変えず、威厳も失わずに全てを受け入れる度量が彼にはあった。

そんな池田の心臓が飛び跳ねた。

ある情報が飛び込んできたからである。

「イギリス公使オールコックがここ上海にまで戻ってきているとの情報があります」

「オールコックだと？」

一時イギリスに帰国していたが、赴任先の日本へ戻るために上海に立ち寄っているというのである。

（偶然か？）

疑心を抱いた。

だが池田は直ぐに考えを切り替えた。

「イギリスがどう動くのか知るのによい機会だ。最も難しい相手になるだろうからな、きっとこれは天の巡り合わせだ」

と捉えた。彼も天の導きを信じているのだ。

直ぐに動く。

「オールコックの居場所を探せ！」

池田の方から面談を求めるつもりだった。

イギリス公使オールコックの許へと足を運んだ。

握手を交わし、使節一行がヨーロッパへと送られるようになった事情との経緯を、池田長発は説明した。

「横浜を開港して以来、日本人の心に多少の不折合いを生じております。その一端が攘夷浪人などによる異人斬りといった過激行為です。我々はそれを抑え鎮めるため諸外国に横浜の鎖港を申し入れる事にしました。そのためにそれぞれの本国との交渉に向かうのです」

池田はイギリスとの本交渉の前に、横浜鎖港の申し入れという日本の方針を公使オールコックの耳に入れたかったのだ。

（その返答具合を見ておきたい）

案の定、オールコックの顔色が忽ち変わった。驚きを隠せないのだろう。

池田は続けた。

「イギリスへの鎖港の申し入れはニール代理公使に伝えてあります。イギリス本国へはフランスとの交渉後に向かいます。オールコック公使からも本国政府にそう連絡して頂きたい」

するとオールコックは遂に声を発した。荒げた口調であった。

「我がイギリスは横浜鎖港など決して認めない！　そしてイギリス本国政府が横浜鎖港など認めるはずがない！　談判は必ず失敗に終わるはずだ！　何故なら私は本国政府から日本の開港状況を進めるよう改善命令を受けているのだ。　そのために再度日本へと赴任するところなのだからな！」

目を剥くオールコックに対して、池田は静かにこう返す。

「私は日本の代表として特命を受けている身です。だからたとえ鎖港交渉が不調に陥ろうとも日本の誇りある使節として行動し、横浜の鎖港を必ずや成し遂げるでしょう」

鋭い眼力である。

命を賭した武士の心意気、その殺気。オールコックは一瞬怯み、息をのむ。

視線は外さず、池田は軽く会釈して席を立った。

「・・・では、これにて・・・」

離れていく池田長発の背中に向かってオールコックはこう呟いた。

「一度開いた港の鎖港など、今更どの国も受け入れはしないぞ！」

強気な言葉とは裏腹に、寂しそうな目をしていた。

（漸く開いた近代の扉を、再び閉じたいのか・・・）

ただ、じっと彼らを見送った。

その後、使節一行はフランス軍艦ル・モンジュに戻り、予定通りフランスに向かって出航したのである。

— 京 —

竜馬にある女の影が近付いていた。

それは大仏と呼ばれる一角での出会いであった。

三十三間堂の南側には方広寺があり、この一角は人々から大仏と呼ばれている。それはここに奈良の東大寺をしのぐほどの大仏があったからである。

そして方広寺の南大門の南側に河原屋五平衛という人物の隠居処があり、そこを土佐の脱藩志士達が隠れ家としていたのである。

竜馬は天誅組に参加した土佐出身志士の残党をそこに匿っていた。

この隠れ家には竜馬を始め、望月亀弥太ら海軍塾生、北添佶磨などが出入りしており、長州へと流れた池蔵太や中岡慎太郎らもかつてはここを利用していた。

また、ここには志士達の面倒を見てくれる世話人の女もおり、まさに・・・土佐を捨てた者達の心安まる場所だったのである。

世話人のその女の主人は元長州藩士であったが、除籍処分となって京の三条南で医者を開業し、中川宮の侍医として召されていた人物であった。だがその一方で尊王の志士らと積極的に交流しており、安政の大獄に連座して捕えられるなどした挙げ句、病気で没していたのだ。

女はその後、暮らしが困窮したために息子二人を寺に預け、娘二人も奉公に出してここに来ていたのである。

だがその長女は度々ここ大仏に戻ってきては、妹が奉公先で騙されたり連れ去られたと聞かすや連れ戻すため奔走していた。

「妙に面白き女よ」

竜馬はその長女の向こうっ気の強さに次第に惹かれていた。自分でも気付かぬうちに・・・

・・・長女の名はお龍（りょう）。

身の上話を聞くうちに情が移り、竜馬はおりょうを妻に貰い受けたいと切り出していた。おりょうもそれを望むようになり、母親も竜馬という男を認め、竜馬に嫁がせる事を承知していたのである。

しかしこの檜崎家は長州藩から密命を帯びている家柄であって、除籍となった事もその方便であった。

おりょうが竜馬に接近してきたのも理由があったのである。

そうとは知らぬ竜馬は、次第次第におりょうに夢中になっていった。

この時の竜馬は土佐藩の帰国命令を無視していた。

従って再び脱藩の身となり、藩から追っ手を差し向けられる立場だったのである。

（もう土佐藩には戻れん）

少し心の奥が痛むが、それでも何も恐れてなどいなかった。

(わしには天がついちゅう)

その確信があるからである。

(・・・加尾、もうお別れじゃな・・・)

また心がチクリとした。

竜馬は隠れ家を飛び出し、そして神戸に向かった。それは勝海舟から驚くべき知らせがあったからである。

「・・・長崎かよ」

文久四年（1864年）一月二十四日、イギリス公使オールコックは横浜に戻った。

久しぶりの日本の地である。

だがオールコックの機嫌は極めて良くなかった。

約束の新潟、江戸、大坂、兵庫の開港がまだなのだ。それどころか、横浜の鎖港交渉団がイギリス本国へと向かっているというマイナス材料が彼の頭を重くする。

（・・・漸く開港した横浜を再び鎖港などさせてなるものか！）

鎖港交渉団の言葉が尾を引いている。

「まったく！」

幕府の優柔不断さには呆れるばかりだった。

（各地の港を開く事を約束しながら、天皇は依然として攘夷を口にしている。幕府はその天皇を説得出来ず、それは何ら変わらず、何も進展しない。・・・逆に幕府は朝廷側に押し切られる形で、四港の開港延期を決定したのみならず、横浜の鎖港を通告して来るとは・・・。日本は再び鎖国へと戻ろうとしている。・・・新たな商業圏として開国させたはずなのに、鎖国に戻ればイギリスの国益が消え失せてしまうではないか）

己の功績が消えてしまう事を恐れた。

開国させて以降、日本の生糸はイギリスが独占して交易してきた。日本の生糸は西洋諸国での人気も高く、順調に利益を産み出し、イギリスの国益となっていたのだ。

イギリス本国もその功績を認め、オールコックも大きな顔が出来ていた。

なのにそれが失われてしまうのだ。

（そんな事をさせてなるものか！ 鎖港交渉の動きは絶対に承知出来ない！）

そればかりか不穏な噂も聞こえて来ている。

・・・フランスやアメリカが手を組んで実力行使に動き出しているらしい。長州攻撃を計画しているらしいのだ。

オールコックは首を傾げた。

（馬関海峡の封鎖を継続し、通過する西洋商船に対する攻撃を続ける長州。・・・確かにそれは問題だが、徳川幕府に敵対する相手としての長州藩を叩く事が今、必要なのだろうか。幕府と長州が反目するバランスが崩れてしまえば何にもならない）

内戦を起こす事も視野に入れていた。それどころか、

（・・・戦争を仕掛けて国益に支障が出るのは困る。利潤を生み出している生糸交易が台無しになってしまうではないか）

だから長州叩きには乗り気にはなれない。

などと思いながら、オールコックは長崎領事マイバークからの報告書に目を通した。

そして顔色を変えた。

「何だと！」

報告書の内容はこうである。

『長崎貿易の利益は我がイギリスが日本と行っているビジネスの20パーセントを占めている。しかし問題が発生している。日本国は外洋船を持つ事を国法で禁じ、小舟による輸送手段しか許されておらず太平洋を経由する事は不可能となり、長崎に物資を集積するには瀬戸内海を航行して馬関海峡を通過する以外に方法がない。つまり馬関海峡の封鎖は長崎貿易の死を意味する。

・・・これを打開せずして、長崎貿易の復活は有り得ない』

オールコックは渋い顔をした。

日本国内の交易品流通において馬関海峡は絶対の要所なのだ。

(・・・あの狭い海峡が日本国内流通の要なのだ。あそこを押さえている長州が問題になるのは当然という事か・・・、何と言う事だ)

他にも問題となる報告が上がってきていた。

『横浜居留地への流入品目やその量を制限し始め、辺りに砲台を築き、大金を投入して大砲や軍艦といった近代兵器の増強を始めている。兵力を集中する動きもあるらしい』

それが日本人の本質なのだとオールコックは理解しているが、幕府への不満もあり、納得出来ない点多々ある。

(長州が勝手に海峡を封鎖しているにも拘わらず、通商条約を締結した幕府はそれを見て見ぬ振りをし、そればかりか横浜鎖港を打ち出してくる始末ではないか)

日本人は屈服しているような素振りを見せながらも、まるで屈服などしていないのだ。

「そういうものか、日本人とは」

だがオールコックはイギリス公使である。イギリスの勝ち取った権利と国益を守る任務があるのだ。

オールコックは考えた。

(もしも幕府の主張する横浜鎖港が実施されれば、必ずや居留地を勝ち取ったはずの諸外国と日本の間で戦争になるだろう。場所は江戸湾、或いは大坂湾。・・・もしもそれで交易が止まれば、それはイギリスの国益にとって大きな損失になるのは間違いない。しかしその前に馬関海峡の封鎖を軍事力で解除させれば、それを目の当たりにした幕府は横浜鎖港を引っ込めるに違いない)

ならば、

「フランスやアメリカが主張する馬関海峡・長州攻撃にイギリスも同調すべきなのだろう」

京では賢侯達が朝廷から参豫という地位を得て、徳川幕府に代わる政体を誕生させていた。参豫会議と呼ばれるものである。

つまりもう徳川幕府は力を失い、代わって親藩や外様大名が朝廷の下で世の中を動かし始めていたのである。

徳川幕府の政権能力は最早消え失せてしまったのだ。

そして将軍後見職の地位にある一橋慶喜への信頼度は幕内で地に落ちていた。

「将軍後見職の地位にありながら朝廷参豫として振る舞うとは、幕府を軽んじている。つまり将軍を軽んじているのだ」

江戸場内の幕閣と慶喜との間には深い溝が出来てしまったのである。

そして慶喜自身、確かに幕府を見限っていた。

(・・・幕府は明らかに求心力を失い、諸藩を制御できなくなっている。それは誰の目にも明らかだ)

だから慶喜は、日本の中心となった京で公武が合体した体制の政権運営を確立するのが最善だと考えたのである。だが、それが島津久光主導の参豫会議という形に収まっていた事に慶喜は不満があった。

(・・・背後から薩摩に操られているのか)

それが気に入らなかった。

(参豫会議が力を持ち過ぎるのは良くない。徳川家に代わって薩摩が実権を掴む事になってしまう)

とそれを否定していた。

(何としても参豫会議を空中分解させなければならない。然りとて徳川家はもう駄目だ。ならば我ら水戸の血を引く者で朝廷を動かして、この日本を正しい方向へと導くしかない)

慶喜は水戸徳川家と中川宮が連携する独自の公武合体政権を心の中で描き始めていたのである。

中川宮は長州や志士から魔王と呼ばれていた。

しかし孝明天皇の信頼は厚く、中川宮が宮家の列に新しく加わる事を許し、新たな宮号を与える事を決めていたのであった。

その際には京都御所南方の旧・恭礼門院の女院御所跡地に屋敷が与えられるなど、中川宮は実質的に朝廷の最高権力に登り詰めようとしていたのである。

その一方で、鳥取藩士・河田景与ら尊王攘夷過激派は、中川宮の屋敷への放火や京都守護職・松平容保の襲撃などを計画し、そのために長州に通じる古高俊太郎に大量の武器を用意させていた。

公武合体政権を目論む一橋慶喜や中川宮に対し、尊王攘夷派はあくまでも徹底抗戦の構えであ

った。

朝廷参豫となった賢侯達によって朝廷は動き始めていた。
そして朝廷は京を乱した長州藩に対してある決定を下した。
それは、

『長州藩への家老三名の召喚及び勅使による訊問』
である。

問い質す件は、

- ・ ・ ・ 京から七卿を誘い出した件
- ・ ・ ・ 幕府からの詰問使を殺害し、幕船・朝陽丸を抑留した件
- ・ ・ ・ 幕船・長崎丸を砲撃して撃沈させた件

この三件である。

更には『三条実美らの京への帰還』を求め、応じなければ討伐する事を決定していた。

それを受けて長州藩は、朝廷に対して三条実美らの復職と藩主父子の上京を嘆願してきたのである。

だが、朝廷はその要請を聞き入れず、幕命を待てと命じた。

朝議は割れた。

「長州藩家老の召命は京にすべきか、大坂にすべきか」

結局、長州藩に家老らの大坂召命を通達したのである。

こうして長州藩が朝廷に訴える機会は完全に失われたのであった。

それを知った中岡晋太郎は怒りに震えていた。

「参豫となった賢侯達は賊だ」

長州の先兵として京を探っていた晋太郎は、怒りのまま長州にそう報告したのである。

土佐の弾圧から逃れた晋太郎は、長州と行動を共にしていたのであった。

そんな最中、

二条城の老中達の許にある情報が届いていた。

「西洋諸国が連合し、艦隊を日本に差し向けようとしているとの噂があります」
というものだった。老中達はうろたえた。

「噂の出所はどこか」

「分かりませんが、おそらくは西洋人の商人による情報網かと」

「うむ、そうだろう」

そう考えると合点がいく。

老中達は話し合いに入った。

「・ ・ ・ 狙いはどこだろう」

「江戸か、京か」

「いや、奴らの狙いは長州だ」

「長州か」

「そう長州藩だ。馬関海峡で長州藩から攻撃を受けた四カ国が手を組んだようだからな」

「協力して長州退治をしてみようという事か・・・」

「今でも長州は攘夷を叫んでいる。だから西洋船の馬関海峡航行の安全は未だ確保されていない」

西洋人にとってそれが大問題なのだ。

馬関海峡は日本国内の物流の要所であり、そこが機能しなければ、交易による西洋人の利益も生まれてはこない。

「不平等条約が有効なうちに、日本が本格的な交易に目覚める前に、暴利を取れるだけ取ってしまいたい。それが本音だろう。だから馬関海峡が重要なのだよ」

幕府も漸く不平等条約に気付き始めているが、それを改善するのは簡単ではない。

「ともあれ今の我が徳川家にとって、長州藩への攻撃は有難い」

そんな一面もある。目の上のコブとなっている長州が邪魔なのだ。

「だが、もしも長州が異国の手に落ち、そこが西洋人の領土となれば一大事だ」

・・・絶対に日本の国土を西洋人に渡してはならない！

それだけはいかに腐りかけた幕府でも心底そう思う。

そこで幕府は軍艦奉行の勝海舟を長崎へと派遣する事を決定したのである。かつてロシアによる対馬占拠事件を解決した手腕のある勝海舟に、西洋諸国との調停役を命じたのだ。

その命令を受けた勝海舟は驚きもしなかった。

（長崎行きか。やはりそうなったな）

独自の情報網から西洋人の動きを常に掴んでおり、西洋艦隊を差し向けてくるであろう事も予見していた。

そして思案した。

（長州が国際法に反しているのは確かだ。

イギリス・フランス・オランダ・アメリカの四カ国が連合艦隊でそれを潰すつもりだ。

いや、それを口実にして長州を四カ国の管理下に置こうとしている。

日本の国土を直接統治しようとしている。香港のように。

それは絶対に許しちゃならねえ。

清国のようになっちゃならねえ。

だから長州藩は高杉を登用して異国と戦うつもりだ、まだまだ。

奴は身分制度を度外視した志願兵を緒隊に纏めている。その中心が奇兵隊だ。

奴は身分制度を壊した。

日本のこれまでの絶対的な武士の特権を否定した。もう武士の威張る時代は終わりだ。そういう意味だ。

長州・・・朝鮮か）

もうひとつ勝海舟には密命が下っていたのだ。

朝鮮半島の情勢を探る事である。

そこでこう考えた。

（塾生の中でも将来的に異国との交渉に可能性を感じさせる者を長崎へと連れて行く好機だ）

坂本竜馬と近藤長次郎の二人である。

（異国人に慣れておかねえとな、さるお方に会っておいて損はねえ）

と心の中で呟いた。

（竜馬達を随行させよう）

そう決めた。

ただ気になる話も舞い込んできている。

土佐藩が坂本竜馬ら勝海舟門人に帰国命令を出したというものだ。

「まだ足を引っ張るか・・・」

勝海舟と同様に、幕臣にあって国防の近代化政策を推し進めようとしている人物がいた。・・・
・小栗上野介こと小栗忠順（ただまさ）である。

小栗忠順と勝海舟。

両者が互いに歩調を合わせる事はなかったが、何故か目指すものは似通っていた。

そしてこの二人が日本の国防の基礎をそれぞれ別の形で構築していくのであるが、恰も互いを好敵手を運命付けているかのように歩みは似通っている。

小栗忠順の近代化の目覚めは、安政七年、日米修好通商条約批准のために米艦で渡米してそのまま地球を一周した経験である。その際に西洋の圧倒的な工業技術力を痛感し、徳川幕府の終焉を予期した小栗忠順は、それでも徳川幕府の下で日本の近代化を進める事こそが最優先だと考えたのである。

やがて外国奉行となった小栗はロシアによる対馬占領事件に遭遇し、ロシア艦隊の脅威を目の当たりにさせられたのである。

「・・・日本にはあれに勝る軍艦も海軍もない。だから好き勝手にされる。日本にはまず軍艦が必要だ。異国に侮られぬためにも鋼鉄製の軍艦が必要なのだ。・・・近代化には製鉄が不可欠だ」

勘定奉行に就任すると小栗は横須賀への製鉄所建設を推し進めたのである。そればかりか造船から銃や大砲・弾薬までも国内生産する事を計画し、陸軍の洋式化、更にはカンパニー立ち上げまでも視野に入れていたのである。

そして、勝海舟である。

小栗忠順が日米修好通商条約の批准書交換使節団として渡米した際に、使節団護衛のために咸臨丸で追従していたのだが、そこで彼は大海原を渡る大型軍艦の重要さとそれを動かす人材や技術力向上が急務だと痛感していたのだった。

そして幕府の政事総裁だった松平春嶽や元外国奉行の大久保忠寛（ただひろ）の後ろ楯を得て、海舟は坂本竜馬らを駆使して海軍操練所の創設や浪人問題の解決に動いたのである。

造船よりも航行させる人材確保の難しさを訴えて、諸藩の脱藩浪人や志士を海軍塾生として私塾に受け入れる事で、幕臣に拘らぬ海軍操練所の設立を進めたのだ。その中心となったのが土佐藩の下士であり、坂本竜馬だった。

海舟は国内の混迷の基となった京の浪人や志士達を海軍の兵士として活かすそうとしたのである。

そして彼の思考もまた徳川幕府の終焉後に向いていた。実力のある雄藩との連合体も視野に入れて、京が中心となった国政の各種問題を解決しようとしていたのである。

小栗忠順と勝海舟の二人は西洋文明を目の当たりにし、先進性に触れた事を切っ掛けに日本の

ために行動を起こした。

ただ両者の観点も方法も異なったものになった。

・・・造船など科学工業力による国防を幕府を中心に目指す小栗忠順。

・・・志士や浪人など幕府以外の人材を海軍に利用して国防を強化しようとする勝海舟。

それが両者の違いだった。

だが目指す目的は同じ、・・・日本の未来のための国防である。

決して交わる事のない、それぞれの信じる道を交互に浮き沈みを繰り返しながら進んでいくのである。

「長崎行きの準備をしておけ」

と勝海舟に命じられてから塾生達は心躍っていた。

「本当に長崎に行けるのかあ」

「そうよ、一度は行ってみたいと思うちょっと」

そして遂に、

「いよいよいくぞ、長崎へ！」

と海舟が竜馬に告げたのはそれから数日後の事だった。

軍艦奉行勝海舟が幕府より長崎出張を命じられたのは二月五日のことである。

イギリス・フランス・オランダ・アメリカの四カ国の連合艦隊が馬関海峡の封鎖行動を続ける長州藩に対して攻撃するという情報を幕府が聞き付けていた。

そこで実績のある勝海舟に頼ってきたのだ。

「何としても欧米四カ国の下関攻撃を中止させよ！」

本来なら外国奉行なりが正式に行動すべきところだが、幕府は勝海舟の調整力に頼った。嘗て対馬をロシアが占拠した際に、イギリスの力を利用してロシアを立ち去らせた経験がある。イギリスと面識があり、信頼関係も出来上がっているとの判断からである。

— 大坂・天保山沖 —

竜馬は数名の海軍塾生を伴って観光丸でやって来た。大役を命じられた海舟と合流するためである。

ただ心が痛んでいた。それは、これがこの慣れ親しんだ観光丸を操舵するのが塾生にとって最後になるかと思われたからである。それでも海軍塾生は実習船観光丸を失う事を覚悟していた。

だが、勝海舟は建白書を提出していると口にした。

「観光丸を正式に操練所付けにして頂きたい。福井藩の黒竜丸を買い上げる事で、それを利用して運送業務を行い、その稼ぎを操練所経費に用いるようにさせて欲しいとお願いしているところさ」

そう幕船・黒龍丸の取り扱いについても嘆願していたのである。

塾生達は飛び上がらんばかりに喜びを表した。

海舟はこうも言った。

「神戸操練所建設の完成は近い。そこで技術の高い者は幕臣に限らず諸藩士からも任命して頂きたいと正式にお願いしたよ」

「本当ですか！」

つまり幕臣でなくとも幕府の操練所で海軍活動が出来るというものである。

更に塾生達は喜んだ。

「ただし、条件があると云われたよ」

「えっ」

「長崎出張を命じられたがちや」

竜馬がそう言った。

「今回の長崎行きが条件ですか？」

塾生が尋ねた。

「そうだ」

「では、そのお役目は」

「英仏米蘭四カ国の長州攻撃阻止よ！ 外国勢との調停をせよとの命令よ！」

長州藩が海峡を航行する外国船への砲撃を繰り返し、何度報復されても諦めようとはしないのだ。アメリカ、イギリス、フランス、オランダの四カ国は共闘し、大規模な報復を準備している。国内では幕府と長州藩とが緊張関係にある。それでも幕府は国土防衛の観点から、四カ国の大規模な報復を回避するため、説得役の勝海舟を長崎へと向かわせる事になったのである。

「それが条件・・・」

「何とかやってみるさ」

海舟は自信に満ちた表情を見せていた。

幕府船の第二長崎丸に塾生達を乗り込ませた。

「よし、行こう！」

船は大坂を離れた。

そして神戸に立ち寄り、近藤長次郎、千屋寅之助、安岡金馬ら数名を合流させた。

近藤長次郎は塾生ではないが、彼を同行させるのは竜馬の強い希望によるものである。故郷の土佐では開明的な河田小竜のところで学ぶなど、異国への熱意が強い人材だと重々知っているのだ。

（・・・長次郎は異国との交渉の場で、近い将来きっと役に立つ）

竜馬はそう見ていた。

河田小竜との約束もある。・・・人材は河田小竜が用意するという約束が。

「目指すは九州！ 出航ぜよ！」

こうして勝海舟以下坂本竜馬、そして塾生十四名を乗せた幕船第二長崎丸は、二月十四日、神戸の港を離れて西へと進路をとったのであった。

「四カ国との交渉がそんなに簡単に出来るはずがないとは思うがな」
海舟は不安も見せる。

「けんどこれを成功させれば神戸操練所の先行きも明るくなるろう」
竜馬は希望的だ。

「無茶を言う」

「やってみる価値はあるき」

どこまでも竜馬は前向きだった。

「とにかく行くしかないき」

海風を浴びながら竜馬は遠い目をしていた。

物思いに耽っている。

(子供の頃に抱いた憧れがある。・・・長崎にはそれがあるがよ。・・・きっと長崎には遠い日の夢が溢れているに違いないちや)

・・・三十歳となった今、でも異国への憧れは尽きない。

流れの速い明石海峡を抜け、船は姫路沖に達した。

三つ子の魂は百まで続く。

竜馬には異国への憧れがある。そして物事の本質を見極めながら行動するのも、また彼が子供の頃にすり込まれた土佐南学思考がその根底にあるのだ。そして竜馬は独自の価値観を築き上げていた。

・・・特異な感覚。

いや、虚空蔵に通じる確信と言うべきものかもしれない。

・・・その虚空蔵とは何か。

虚空蔵とは過去から未来まで全ての事象が記録されているという無形の存在であり、空海や日蓮の意識もこの虚空蔵に繋がっていたのではないかとされている。西洋ではアカシックレコードと呼ばれ、やはりその存在が認識されているのだ。

竜馬は子供の頃から幾度も聞かされてきた事、それは空海が室戸岬での修行中に虚空蔵菩薩と一体化したという逸話である。それを何度も何度も聞かされていた。

魂が次元を超えたところにある真理に触れる能力、普遍の価値観を志向する能力。

竜馬の人並み外れた先見性、他心通にも似た直感と洞察力も、それに似たものではないだろうか。

善を求め、無知を恥じず、目先の日常に流されず、未来に恐れを抱かない。そして自分の信じた夢を決して捨てずに追いつけて、障害を乗り越える。

それが竜馬の生き方だ。

それを天が愛しているのは間違いないだろう。

・・・根底で天を信じている。だから失敗を恐れず、夢を追い続ける事が出来る。・・・そして固定観念にとらわれずに善悪を見極め、本質を見抜く事が出来る心の目を持っている。

それが坂本竜馬であり、彼を突き動かしている基なのだ。

・・・つまり竜馬は己の使命を見付けている！ 魂を燃やすべき道を見付けているのだ！

それこそが人を惹き付ける彼の魅力なのだろう。

竜馬ら海軍塾生を乗せた第二長崎丸は、本州沿岸を西に向かって行く。

やがて彼らの目に・・・海峡が映った。

「馬関海峡じゃ」

船は海峡の遙か手前で停船した。

勝海舟が望遠鏡で辺りを伺っている。

「覗いてみる」

竜馬に望遠鏡を手渡した。近眼の竜馬には助かる道具だ。

良く見える！

やがて気づいた。・・・海峡の東岸は明らかに戦争の跡だと見て取れる。西岸の小倉藩側とは相反し、東岸の長州側だけが焼け崩れている。設置されていたであろう大砲は全て破壊され、周辺にあったであろう民家は全て焼かれ、壊滅的な被害を受けていたのだ。

「アメリカとフランスの報復攻撃があったのさ」

「実際に異国と・・・」

「ああ戦ったのさ。攘夷を実行する長州は馬関海峡を封鎖して無通告でアメリカ・フランス・オランダ商船に砲撃を加えただろ、怒った西洋人が戦艦を繰り出して反撃したのさ。その結果がこれよ」

黒く焼けた東側に視線を移しながら海舟はそう漏らした。

だが西側、幕府寄りの小倉藩にはまるで被害の跡がないのが不自然に見える。

「そんな・・・長州は日本の尊厳のために戦ったのに・・・小倉藩はそれに手を貸さずにいたのかよ！」

「長州以外は攘夷など出来ないと思っている。だから手を出さない。それが現実よ」

「くっ」

竜馬は唇を噛んだ。

そればかりか幕府は異国船の修理をしてやったとも聞いている。

「まったく！」

「だが、長州は死んじゃいねえよ」

海舟はそう口にした。

確かにちらほら長州藩兵の姿が見える。

破壊されたはずの砲台の修復を進め、対岸の小倉藩にも藩士を送り込んでいるようだった。そこに新たな砲台を築き始めていた。

あくまでも西洋船に対する海峡封鎖を続行しているように見えた。

「・・・大和民族の誇りは捨てちゃらん」

「そうさ、長州は全員が死ぬまで戦うだろうよ」

その言葉が竜馬に染みた。

なのに異国になびく幕府の不甲斐なさ。それを思い出すと無性に腹が立つ。

「偉そうな面した幕府役人が日本をダメにしちゅうんじゃな！」

その言葉に勝海舟も頷いた。

「その上で、次は四カ国連合艦隊が長州叩きにやって来る。・・・叩く程度なら幕府にとっては有り難いが、もしも長州に上陸してその領土を四カ国が手に入れるような事にでもなれば一大事だ」

「日本侵略の糸口にされる」

「そう国土を手に入れば地続きだ。日本侵略が容易くなる」

「くっ、絶対的な危機ぜよ！」

やがて、

「とにかく、これ以上ここに居るのは危険だ」

「南下しよう」

竜馬らを乗せた第二長崎丸は馬関海峡を離れた。

熊本藩の飛地である九州・佐賀関に向かったのであった。

非凡さを発現し始めた竜馬。

とは言え、絶対的な真理を手に入れているわけではない。まだまだ不完全な人間である事は確かなのだ。

だから尊王や佐幕、攘夷、開国といった言葉が踊る世の中にあって、その根源的な問題の解決方法を追い求めているのだ。

今、竜馬ははこう見ている。

(根本原因は日本人と異国人との交わりにある)

という事だ。

(そして日本という国は昔から和をもって近隣からの異国人を受け入れてきた歴史があるが、より異質な西洋への恐怖心は一層強い。その西洋文明と西洋人への恐怖心が増幅されて、同じ日本人に向けられてしまっているのが問題なのだ)

と本能的に感じている。

徳川幕府に対する西南雄藩の怨念。支配者層である幕臣に向けられる志士や浪人達の怒り。

それらがある。

(日本人同士で争い、消耗して日本が弱体化するのを西洋人は狙っている。異国人はその好機を待っている)

事実、歴史がそれを物語っている。西洋人はそうやって世界中に侵略の魔手を拡げ、植民地を拡大してきたのだ。

文明と文明の接触は戦を生む、それが人類歴史の常である。

しかし日本だけは異なっていた。

遙か昔から日本には多くの隣国人が流れ込んで来たが、日本人はその異文化や思想・文明を受け入れ、融合して来たのである。それが日本国の優秀さであり、日本歴史なのだ。

吸収と融合・・・つまり『和』である。支配ではなく和。和こそ日本の根元的な精神なのだ。

・・・しかし今、この幕末、西洋人による侵略は和をもって吸収・融合できるのだろうか。

竜馬は感じている。

(人の心の弱さは寛容よりも攻撃を選び易い。出来る事ならば平和裏に交わりたいのが理想でも、人は本質的に相手を支配しようとするのだ。恐怖心がそうさせる)

竜馬は本能で更にこう感じ取っている。

(西洋人は農耕よりも狩猟を生活の糧としてきた民族だと聞いちゃう。だから生物への攻撃性が強い。そして唯一の神を絶対神としてそれを善悪の基準としているから、それ以外の神の民は殺戮も構わない。それが西洋人の本質よ)

一方、日本は八百万の神を奉る多神教であり、全てを神としてを和を成す民族である。

それに対して絶対神を崇拝する一神教の西洋人は常に攻撃的で、異民族に改宗を迫り、拒めば殺害も厭わない。異民族そのものを否定して殲滅してしまおうとするのだ。それが西洋史でもあ

るのだ。

歴代天皇もまたそれを予期していたのだった。

いずれ西洋人の脅威が迫り来るであろう事を。

だからこそ天皇は異国を征するため武家の棟梁として征夷大將軍を任命してきたのである。それが江戸期は徳川家であった。

しかし八万騎と言われた徳川將軍家は異国と交戦する気概も能力も失っていた。

・・・幕府は腰抜けになっていた。

そして諸藩の下級武士が立ち上がったのだ。

「我等が日本を変える！ 世の中を一新するのだ！」

下級武士にこそ武士としての矜持が生きていた。そしてこれまで虐げられてきた怒りがその根底にある。

「異人など斬ってしまえ！ 攘夷だ！」

「天皇を担ぎ上げて徳川の世を終わらせるんだ！ 尊王だ、尊王倒幕だ！」

水戸と長州がその中心となり、尊王攘夷を合言葉に志士や脱藩浪人達が京に上っていく。徳川幕府と対峙する一大勢力が京に集結したのである。

これが幕末の状況である。

・・・ただ同じ下級武士の中でも坂本竜馬は少し違った。

「日本人同士で斬り合うたらイカン！ それよりも交易よ、交易を通して日本も異国も互いに利益があるようにすれば良いやないか」

商人の発想である。

取引双方に利益が生まれる事が大切であり、そのためには双方の信頼関係が必須なのである。そこには和が必要なのだ。

つまり竜馬は交易という形で和を生み出し、それによって諸問題を解決出来るのではないかと考えた。高度な文明を有する西洋に対して対等な立場で交易をし、それを通じて異文化同士ようになる事を描いているのである。

「和をもって異国の文化を受け入れるがよ」

竜馬の度量である。

・・・しかし、人には業がある。業が運命を狂わせてしまうのだ。

「敵は殺せ！」

武士はそう叫んで刀を振るった。

それが人の業である。

日本側にも異国側にも憎悪が生まれれば、相手の血を流さずにいられない。

そもそも人は善悪を持ち合わせている。心の中で常に善悪が交差しているのだ。

・・・何が善なのか、悪なのか。

・・・融合か、対立か。

人にはそれぞれ迷いがある。

竜馬自身の中にも迷いがあった。だから今、会いたい人がいる。

「途中、熊本藩に寄って行きたいがです」

竜馬はそう言った。

それは・・・、

「横井小楠殿だな」

海舟はお見通しである。

「この船が目指すは豊後の佐賀関だ」

勝海舟は同行する竜馬と共に九州・佐賀関に上陸し、熊本を經由して長崎に入るつもりであった。

彼等に乗せた第二長崎丸は瀬戸内海を西へ西へと向かっていく。

翌日に佐賀関へと到着する予定であった。

イギリス・フランス・オランダ・アメリカ。

四カ国連合艦隊の長州攻撃に対する調停の命を受けた勝海舟は、坂本竜馬以下、近藤長次郎、千屋寅之助、望月亀弥太ら塾生達と共に長崎へ向かっていた。だが海の要所・馬関海峡を長州藩が封鎖しており、陸路で九州を横断する路程を選んだのである。

彼等に乗せた第二長崎丸は伊予灘を下り、四国から細く突き出た佐田岬をかすめて九州に近付いた。そして豊後水道を横切り、九州・佐賀関の港に錨をおろした。

海舟と竜馬、そして塾生達が下船した。

「ここからは陸路で、まず熊本を目指すぞ」

港を離れ、石垣が積まれた狭い坂道を上って行く。港を見下ろす高台には漁民の家々があって、その外れに寺があった。

そこからは遙か豊後水道、そして四国の佐田岬まで眺める事ができた。

「何と眺めがいいのう」

「この日の宿はここ徳応寺だ」

海舟がそう言っているところに住職が出迎えに現れた。

翌朝、一行は寺を後にした。

そこから峠を越え、熊本へと続く肥後街道を西へ西へと進んで行く。この街道は熊本藩の参勤交代の道である。

その夜は熊本藩の飛び地・鶴崎本陣にて宿を取り、その翌日は野津原の石畳を抜けて街道沿いの久住で熊本藩主・細川別邸に宿泊した。

その後は内の牧、大津宿と阿蘇を経由して漸く熊本城下に入ったのであった。

— 熊本城下 —

一行は幕府からの使者として新町の本陣に招き入れられた。

すると勝海舟はこう言った。

「お前らは横井小楠先生のところへ行ってくれ」

と。

海舟が熊本藩主と面談している間に、横井小楠の置かれた状況を見てきて欲しいとの計らいである。

「俺は幕府としての立場上、謹慎中の小楠に直接会うわけにはいかねえ。だからお前らだけで先生に会って神戸操練所の状況を伝えて欲しい」

とも言う。

「任せて下さい」

腰を下ろす暇もなく、竜馬は近藤長次郎ら数人を引き連れて飛び出した。

横井小楠の下へと向かう竜馬の立場は勝海舟の遣いである。

そしてそれと同時に竜馬は、元外国奉行・大久保忠寛の手足として緒藩の動きを探る密偵の立場でもあるのだ。横井小楠の置かれた状況を正しく報告しなければならないだろう。

けれど・・・竜馬は思う。

「わしは天下の坂本竜馬ぜよ」

勝海舟や大久保忠寛、そして松平春嶽に通じつつも、長州や土佐の攘夷派の志士とも気心は通じ合っている。そう信じている。

(わしはどちらも信じちゅう)

体制側と反体制側。

相反する立場に通じているが、それを包括出来る男だという確信がある。

自負がある。

(しかし簡単ではない。・・・開国を無理に進めれば国内が混乱し、分断するだろう。もしも幕府開国派と雄藩攘夷派の戦争にでもなれば、日本国は自ら消耗し疲弊する。それこそ異国の思う壺だ。・・・かと言って攘夷一辺倒でも異国には勝てはせん)

・・・どちらもダメだ。

(ではどうすればいい。どうすれば日本を守れる。どうすれば長州や志士達の命を守れる)

竜馬は悩んでいる。

だから尊敬する横井小楠に尋ねたいのだ。

竜馬自身が福井で会った際に衝撃を受けた人物、松平春嶽だけでなく大久保忠寛も認めている人物。それが横井小楠なのだ。

・・・四カ国連合艦隊と長州の衝突が迫る今、異国との関係性において考え方を改める必要があるのだろうか？

「だから今、教えを乞いたいんじゃ。横井小楠先生に聞いてみたいんじゃ！」

数年前、熊本藩士の横井小楠は幕府の政事総裁職・松平春嶽に請われて政事顧問となり、幕政改革などに深く関わってきた。その際に勝海舟とも親しくなったのであった。

その後小楠と海舟は手紙のやり取りを続け、この国の進むべき方向性について意見を交換してきたのである。この頃から松平春嶽、大久保忠寛、勝海舟らは横井小楠を先生と呼ぶようになっていた。

勝海舟はその頃の事をこう説明する。

「一を聞くと十が分かる人物、途方もない聡明な人だと感じたよ。初めはただ手紙で外国事情を尋ねてくるくらいで、面と向かって話したことはなかった。その後、越前の屋敷で会って、幾度か訪ねて来るようにもなった。深く先生の識見に感服したのは、長州の動きについて相談した時さ。どうしても国内問題ばかりに気をとられるが、もしも倒幕して国内で内戦状態になったらそれを利用して諸外国列強に日本が支配される恐れがある、そう聞かされて目が覚めたよ」

小楠は国内での立場でなく、世界の中の日本として欧米列強と対等に付き合っていく視点で物事を捉えていたのである。

そこで双方が合致した。そんな関係性が小楠と海舟に出来上がったのである。

横井小楠の主張は『国是七条』というものである。

その柱は『公共の政治』と『海軍の増強』であった。

公武合体や尊王攘夷によって主導権が乱れている政治体制を一本化して、欧米列強と対等に交渉するために海軍を強化しなければならないというものである。

・・・次の政治体制と日本海軍の強化をどうすべきか。

それが問題だというのである。

横井小楠も大久保忠寛も大政奉還を視野にいれていたが、海軍の重要性は揺るがない。無論、勝海舟もそれに同調していた。

そんな優れた見識を備えた横井小楠を一橋慶喜は『非常の人傑』と呼び、彼の主張する『国是七条』を実現していくために、幕府に直接登用したいと申し出ていた。小楠は断ったが、そんな時、事件が起こった。

小楠が刺客に襲われ、その際に熊本藩士を見捨てたとして『土道忘却』という罪に問われたのである。熊本藩より重い処分を受け、熊本に戻ると、土席剥奪・知行召し上げ・蟄居となった。

・・・武士としての身分も俸禄も失ったのである。

同時に兄を亡くした小楠は家督を継ぎ、熊本城下から二里ほど離れたところでひっそりと暮らし始めた。

生活は極めて苦しく、松平春嶽からの援助で食い繋ぎ、塾を開いてその賛同者などから施しを受けるなどして何とか生きながらえていた。

「あれだけの人物を・・・」

日本の危機を救うだけの人物が世に埋もれてしまっている事を海舟は残念でならなかった。しかし熊本藩から処分を受けている横井小楠を、幕府の重要閣僚たる勝海舟が正面から訪ねる事は出来ない。

それらを理解した上で竜馬は、海舟の使者として沼山津へと向かっていたのだった。

田園地帯だった。

何とも長閑なところであった。

竜馬は数名の塾生と共に熊本沼山津に足を踏み入れていた。

そして横井家と思われる邸宅に小楠を訪ねた。

「小楠先生、居られますか？」

竜馬が声を張り上げた。

「おお！ 坂本か」

小楠が自ら出迎えた。

「はい、お久しぶりです、先生」

はち切れんばかりの笑顔で竜馬が答えた。

「江戸、福井、そして熊本。お前と会うのは三回目かな。・・・まあ上がれ」

小楠はそこで塾を開いていた。

「わしはここを四時軒と呼んでおる」

「四時軒ですか」

「そう、ここは春夏秋冬、四季の景色をすべて楽しむ事が出来るからだ」

確かに外は田園が広がり、山々の移り変わる自然が飛び込んでくるようであった。

「まっこと」

そう竜馬は呟いた。ただ障子にはガラスが組み込まれているのが珍しい。

（ギヤマンか）

少し気に掛かった。

「ところで用件は何だ、勝海舟の遣いか」

「そんなところですよ」

竜馬はまず海舟からの見舞い金品を贈り、

「神戸の操練所計画は将軍の許可を取り付けちよりますし、幕府と越前から資金を受けて、海軍の人材育成機関として順調に進んじよります」

と神戸海軍塾の近況を伝えた。

「そうか。とにかく何としても日本海軍が必要なのだ。そして大久保忠寛は何としても幕閣に復帰させるべきだ、勝にはそう伝えていたはずだが」

と小楠は口にする。

「大久保様の復帰は難しいようです。そう伝えてくれと申しちよりました」

「まあそうだろう、簡単ではあるまい」

「神戸操練所は間もなく完成しますが、先行きには不安もあります」

「当然だ、海軍は幕府だけで創れるものではない。諸藩も含め、その協力がないと西洋に通用するだけの日本海軍にはならない。・・・そもそも幕臣だけでなく諸藩の者、下手をすれば浪人から志士までも、その中に紛れ込むのだから色々な問題点も生じてくるだろう」

さすがに小楠である。勝海舟が最も危惧するところをすんなり言い当てた。

「そこが難しい」

「それを何とかするのがお前の仕事だろうが、そのためのお前なんだ」

そう言って小楠は竜馬の目を睨んだ。

「心得ちよります」

竜馬が睨み返す。

「日本海軍に対するわしの考えがある。これからそれを書き記すつもりだ。出来上がり次第お前達に渡すとしよう」

小楠の瞳には土籍を失い閉居する心の陰は見えない。以前と変わらず、世界を睨みつつ、日本の向かうべき方向をしっかりと見据えていたのである。

竜馬はそう強く感じた。

そして前年に小楠と竜馬が福井で拳藩上洛計画について語り合っていた事が、共にまるで遠い過去のように思えていた。

— 京 —

二月十六日、一橋慶喜は中川宮の許に向かっていた。

(使節団を送り込んで横浜港の鎖港を何とかしようとしておるのに、神戸港の鎖港までもとは)

道中の駕籠の中で慶喜は頭を抱えていた。

中川宮は彼を迎え入れた。

そこには朝廷参豫の松平春嶽、島津久光、伊達宗城も既に到着しており、酒肴の用意があった

。

「我が国を西洋の商業圏に組み込むために必死なのだよ、西洋人も」

春嶽がそう口にし、

「そのために日本が穢され、踏みにじられる」

「しかし、いざとなれば西洋人は戦艦を送り込んで来るでしょうな」

などと会話が進んでいるようだった。

皆が揃ったところで酒が入り、思い思いの言葉で神戸港の鎖港問題について語り始める。

「神戸港は京に近すぎる」

「確かに鎖港は崩したくはないが、神戸の開港もやむなしではないか」

「ふむ、これを断れば条約違反とばかりに異国の戦艦が大挙して乗り込んで来るでしょう」

「日本の国土が焦土と化してしまう」

そこまで話し合ったところで事件は起きた。

ダン！

「天下の愚か者めが！」

酒が入っているからか、一橋慶喜の口調が荒い。

「神戸開港は強く反対する！」

更には島津久光・松平慶永・伊達宗城それぞれの顔を指さしながら、痛烈に罵倒したのである

。

「貴公らは天下の大愚物・大奸物だ！」

「何と」

「將軍後見職である私とは一緒にして欲しくない！」

とまで言ったのだ。

当然、場は険悪な空気に包まれた。

「何を申される」

「当然の事を言ったまでだ！」

島津久光・松平慶永・伊達宗城は怒りを見せながら立ち上がり、足早に姿を消していく。

「ふん！」

慶喜はふんぞり返っていた。

ただ一部始終を目の当たりにしていた中川宮は、彼らを止めようとはしなかった。

そして残った慶喜と顔を見合わせて頷いたのである。

機嫌を損ねた久光は完全に参豫会議を見限り、山内豊信が京を退去。続いて他の参預も相次いで辞任した。

慶喜も参預を辞職すると共に將軍後見職を辞したのである。

「世界を視野に入れて教育しておるのだよ」

横井小楠はそう口にした。

四時軒の門下生に己の信じる政治思想を伝えていたのである。

「世界を視野に入れた教育、それをわしにも聞かせて下さい」

竜馬は食らいついた。その感覚に飢えていた。

(日本だけでなく、世界を意識しなければならんぜよ)

それが常に竜馬の根底にある。

飢えた野獣のような目をしている竜馬の声に小楠はこう応えた。

「まず我が日本国も西洋の工業技術を究めなければならない。そしてそれを活用し、西洋諸国を超えなければならないのだ」

「工業技術を究めて西洋を超えるがですか」

「そうだ。・・・そして物心ともに豊かな国家となる、そのためにな」

それが小楠の思想。

竜馬は心洗われる思いがした。

小楠は更に続けた。

「西洋は経済ばかりを優先させる。儲け、利益至上主義だ。・・・それではダメだ。それは人としてあるべき姿ではないのだからな」

「では、どうあるべきがですか？」

「人情を知らなければならない。心徳の学問をもってな」

「心徳ですか」

「そう心徳が大切なのだ。我が国はそうあるべきなのだよ。・・・しかし西洋は違う。経済的な富ばかりを追うから結局戦争を起こし、その挙げ句に補償を求める。自己の益を追う事が最重要なのだ。・・・しかしそうではない。本来、人は真実公平の心を持たねばならんのだよ」

竜馬は大きく頷いた。

「つまりそれは根本的に西洋とは思想や信条が違う」

「そうだ」

「何故にそうまで西洋人は」

それが知りたい。

「問題はキリスト教にある」

小楠はそう断じた。

「あのキリシタンを生むキリスト教がですか？」

脳裏を過ぎった。キリスト教を邪教として恐れていた竜馬だが、故郷の土佐で義兄の高松順蔵が聖書を抱え、日々学んでいたのを思い出した。

「危険すぎる。もしもキリスト教が日本国内に蔓延すればどうなる。仏教と諍いとなり、思想の乱れから秩序が乱れるだろう」

「では我々はどうすれば」

「正義を守り、心を堅くしてそのつけ入る隙を見せぬ事だ！」

「・・・キリストめ」

唇を噛む竜馬。

「それでも我々は心を開いて交易を進める必要がある。双方国の利益に繋がるよう公共の天理を意識しながらな」

小楠も厳しい目をした。

「交易とはこうも危険が伴うかよ」

「・・・くれぐれも異国人には心徳という学問がない。自らの利益だけを追い求めて戦争を始めようとする、そう心得た上で、我々は道義を重視しなければならない」

小楠はそう説いた。

ヨーロッパへもアメリカへも行った事のない横井小楠だが、西洋の一神教思想から民主主義についても理解し、その欠点も見抜いていたのである。

まさに天才的な人物と言えた。

しかしそれゆえに西洋かぶれと見られ、故郷では不遇であった。

だがこの横井小楠の思想が坂本竜馬の心に染み込み、彼の行動力の源泉となり、日本の大転換を現実化させるのである。

一体、慶喜の狙いは何だったのだろうか。

・・・すべては芝居だったのだ。

そう芝居。

一芝居うって参豫達を仲違いさせたのだ、参豫会議を消滅させるために。

・・・参豫会議を消滅させる・・・。

では、なぜ参豫会議を潰す必要があったのか。

それは、これまで国内は天皇の意志の下で朝廷も幕府も攘夷を支持してきたのに、ここに来て薩摩主導で開明派による参豫会議が立ち上がり、開国へと傾倒していくのが問題だったからである。

幕府としては、あくまでも攘夷を天皇に約束している立場であり、横浜鎖港交渉団をヨーロッパに派遣しているところである。幕府の将軍後見職・一橋慶喜としても神戸開港を認める訳には行かないのは当然なのだ。

幕府の重職として攘夷から開国への転換は口が裂けても言えぬ立場なのだ。

ましてや薩摩に従う形で神戸開港すれば益々もって幕府の体面がないではないか。

・・・徳川幕府主導から薩摩藩主導へと転換するのを回避するため、一芝居うって参豫会議を瓦解させたのである。

そして一橋慶喜は朝廷から禁裏御守衛総督に任じられた。

将軍後見職から禁裏御守衛総督へ。

・・・一体どういう事なのか。

・・・その背後で何があったのか。

それは中川宮が一橋慶喜と手を組んでいたという事である。

両者が手を組んで参豫会議を潰し、それに代わる新たな政権を京に出現させようと画策していたのだ。

それが一会桑政権である。

禁裏御守衛総督となった慶喜の配下には京都守護職の会津藩・松平容保、そして京都所司代の桑名藩・松平定敬がついた。それは水戸藩出身の慶喜が同じく水戸家を源流に持つ尾張高須藩出身の容保・定敬兄弟を従えて京で実権を握った事であった。つまり水戸の血が実権を握ったのである。

一橋・会津・桑名を合わせて、一会桑政権と呼ばれた。そしてこれを背後から操っていくのが朝廷の最高権力者となった中川宮であった。

中川宮は公武合体による日本の挙国一致へと向かっていたのである。

一方、長州や薩摩は違った。彼らは徳川に取って代わり、天下をその手に収めようと企ててい

たのである。

その原動力は抑圧されてきた身分の低い武士達の怒りと高い身分への欲求。・・・若者達はその具現化を信じて、倒幕という革命を起こそうとしているのである。

それを背後から後押ししていたのがイギリス。

長州や薩摩を動かして日本に新政府を打ち立てて、骨抜きにしてみようという魂胆なのだ。そこに日本の危機があった。

その頃、突如として佐賀で始まった楠木正成を崇拝する運動が京の学習院に飛び火していた。その火が長州や薩摩をはじめ、各地で燃え上がり始めていたのである。

・・・なぜ今、楠木正成なのか・・・。

文久四年、この年は改元の年であった。

改元議論は前年から続いていた。

「・・・次は『令徳』か『元治』か」

そう提案されていた。

『令徳』とは徳川に令する意味があり、『元治』とは天皇にて治まるとの意味がある。・・・
どちらになるのか、各所に波紋を投げ掛けていた。

そんな中、松平春嶽がこう発言して一つの方向性が示された。

「天下の政権は天皇にある」

また一橋慶喜も幕府老中達も徳川幕府の限界を感じており、春嶽と同じく令徳には反対していた。

「元治の方が相応しい」

そんな方向で落ち着いていき、朝廷の中川宮とも相談した上で『元治』へと改元する事に決まっていたのである。

そして二月二十日をもって、『文久四年』は『元治元年』へと移行したのであった。

その翌日、竜馬は熊本の新町で勝海舟と合流した。

やがて新町を出立し、馬で高橋宿に向かった。次の大津宿で日は暮れたが、そこから渡船に乗り込んだ。

海に出た。

「有明海じゃ！」

対岸には島原が見える。そしてその先には長崎がある。

「いよいよじゃのお！ 長崎は！」

長崎には異国がある。異国の匂い、それだけではない。科学、医療など多くの先進技術や西洋文化が溢れている。

竜馬の到着を待っているのだ。

「まっこと楽しみよ」

きっと多くの異国人がいるのだろう。

「異国人かぁー」

竜馬の心は激しく波打った。

なぜ今、楠木正成が持ち上げられるようになったのか。

そもそも楠木正成は南北朝時代に南朝の天皇・後醍醐天皇に仕えた武将である。

その人物がこの時代において、各地で崇拜され始めたのはなぜか。

尊王の精神が燃え上がったからなのか。

絶対無二の現人神こと天皇。神国日本の絶対的な生きた神である。その天皇に仕えた楠木正成

への崇拝が燃え上がったのは何とか理解できる。

天皇に絶対的忠誠心を見せた楠木正成。

だから称えられるのは当然かもしれない。

・・・しかし疑問もある。

楠木正成は南朝の天皇・後醍醐天皇に仕えていて北朝と対立していた武将である。だが、今の天皇はその北朝の系統を汲む孝明天皇である。

楠木正成が敵視していたのが北朝天皇なのに、その北朝の系統を汲む孝明天皇の時代であるこの時に、南朝に仕えた楠木正成が果たして崇拝されるものだろうか。

南朝側の楠木正成が崇拝され始めたのは腑に落ちない。

・・・それが謎だ。

この時代は世界で権力者を倒して自由を手に入れる若者による革命の炎が燃え上がった時代である。

日本でも徳川幕府という絶対的な権力者が力を失い、長州や薩摩といった雄藩が下級武士を中心に革命の炎を燃え上がらせていた。

倒幕という革命である。

「徳川幕府を倒して封建制を壊し、真の自由を手に入れる」

そう願って立ち上がったのである。

反幕府の動き。

それが如何して楠木正成崇拝に繋がっていくのか。

やはり謎である。

・・・実はそこに、重大な理由と大きな策略が秘められていたのではないだろうか。

<次章> 竜馬と長崎の章に続く

竜馬外伝 i 44 有栖川宮の野望の章

<http://p.booklog.jp/book/123295>

著者：中祭邦乙

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/nakamatsuri/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/123295>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト